芸術表現コースの地域活動報告

別府大学文学部国際言語・文化学科
教授　安松みゆき

文学部の異端の芸術が地域へ

別府大学はながらく文学部だけの単科大学だった。そのなかになんと芸術学科が存在する。これはいまでも全国的に珍しい。というか稀有な事例といってよいだろう。現在は文学部の他に、食物栄養科学部、国際経営学部が増設されたが、やはり文学部の芸術系は大学において異端な存在となっている。当然そこには齟齬が生じてしまう。文系ではたとえば図書館の充実が求められるのに対して、ちょうど理系が実験室を必要とするように、芸術系では実技室が求められ、機材、材料費がかかる。芸術を希望する学生のキャパがもともと多くない。そこにきて設備費などがかかることで、他のコースやひいては他学科に負担をしいてしまう。カリキュラムすら異なってきてしまい、当然芸術は異端の存在となる。さらに10年前に改組によって学科の規模が、コースの規模に縮小された。

より一層「アウェイ化」した芸術系の学生たちだが、芸術の持つ魅力を実践的に広めるため２年前から地域貢献に名乗りをあげはじめている。

地域貢献への後押しと創立者佐藤義詮先生

そのきっかけを与えたのは二人の人物である。ひとりは当時文学部長だった現学長飯沼賢司教授であった。ともかくアートで地域貢献をするようにとの強い要望が伝えられた。それは別府大学に芸術コースが存在することを対外的に示し、その存在意義を高めるというコース内での考えが、別府大学の方針の枠内に位置づけられることを意味した。飯沼教授の根底には創立者の佐藤義詮先生が「文学、芸術、そして歴史の大学」を目指して本大学を設立したことへの考えが存在した。

もうひとりは地域連携センター長の篠藤明徳教授であった。近年別府市は、アーティスト山出淳氏を中心に、非営利団体「別府プロジェクト」の下でアートに力を入れた街の活性化をすすめており、全国から視察がくるほど注目されている。篠藤教授は別府出身で、この動きに関わる人びとと強い結びつきを持っており、その立場からアートの活動の機会を与えてくださったのである。篠藤教授もまた、アートによる地域活動は、佐藤義詮先生の創立の意図に沿うものであることを認識されていた。本来の別府大学のあるべき姿として、芸術による地域貢献への活動の機会を提供してくださった。このような後押しによって地域への貢献が現実化した。

具体的な芸術系の地域貢献事例

・駅のアート化

では、芸術系の具体的な事例を紹介していきたい。まず最初に企画したのは2017年「別府大学駅のアート化」である。資金的な側面は、学長裁量経費より援助を受けた。実は大学名のついた駅は全国でも特にJRでは珍しい。別府大学駅が出来るときに大学名を冠した駅を提案したのは、現文学部長西村靖史教授だったと聞いている。この恵まれた駅名に対して、大学では駅舎を兼ねて国際交流会館を設置している。しかし残念ながら、大学の駅として記憶に残るような特徴は見当たらない。利用している学生も、ほとんど印象のない駅

と答えることが多い。

近年鉄道ブームが隆盛しており、駅もまたその対象に加えられる。ならば別府大学駅をもっとアートで活性化して、利用する学生はもちろん、観光客も写真を撮りたい駅にできないかと目論んだ。

この考えに賛同して応えてくれたのが、卒業生の長浜桂子非常勤講師である。長浜講師の指導の下に有志の学生が集い、アート化により写真にしたい駅を計画した。

長浜講師は、美術が人間のあいまいな視覚に基づくことに注目して、大胆な作品を学生に制作させた。留学生会館の正面の外壁には、もともと円形に近い模様が中途の状態で描かれていた。これを地面に延長してひとつの巨大な円を完成させるという計画を提案した【図１】。当時３年生の学生と研究生を加えて歩道用の特殊テープで白い巨大な円を浮き上がらせた。発想はシンプルだが、凹んだ空間を利用して円の辺を構成するように描き出すには、通常とは異なる逆遠近法を用いる必要が生じ、形状の決定は困難を極めた。しかしこの困難も長浜講師のリーダーシップにより、見事に円を描き出すことに成功した。この作品は今日新聞、大分合同新聞、毎日新聞でも取り上げられた。

翌2018年は思いもかけぬ申し入れが入った。別府駅の甲斐裕明駅長より、駅のアート化の場所として別府駅の提供を受けたのである。別府大学駅のアート化も重要だが、乗降者数では圧倒的に別府駅のほうが多い。そこに学生の作品を飾ることになれば、学生にとってもモチベーションは高まるはずである。そこで別府駅のアート化を目指すことにした。引き続き長浜講師に指導をお願いして、人間の目の錯覚を利用して、学生は幾何学的な矩形が浮き上がる作品を制作した。これも逆遠近法を利用するために制作は大変難しかった。与えられた場所は改札口を入った右側の階段のデッドスペースであった。遠くから眺めることで成り立つ錯視の作品を計画したために、改札口の外を立ち位置として作品を制作することになり、加えて色彩や作業時間の問題も生じた。最終的には、使用する色彩はレモン色に決まり、短時間の作業によって矩形の幾何学を浮き出すことに成功した【図２，３】。

今2019年もまた、甲斐駅長から別府駅の活用の依頼が来たため、それを受けてアート化を実践した。今年度はラグビーワールドカップの年であり、大分でも注目のカードが実施されるために、それにちなんだ作品を壁に飾ることにした。マンガ担当の金孝源専任講師に指導をお願いして、マンガを学ぶ学生が別府の人々がゴールに向かって走る姿の作品を制作した【図４】。合わせてデザ

図１　別府大学駅

図２　右奥の壁に作品を制作

図３　作業中の光景

イン担当の根之木英二特任教授の指導によりデザインの学生とマンガの学生のコラボでゴールをデザインした【図5】。

・「別府プロジェクト」からの依頼

これ以外にも「別府プロジェクト」より、ラグビーワールドカップに関係した顔はめパネル作品の制作が舞い込んできた。この作品については、映像・アニメーション担当の甲元隆則准教授に指導をお願いして、芸術系を志望する二年生と一年生にコンペのかたちでアイディアを出してもらい、最終的に二年生の作品が実施作品として作られた【図6】。

「別府プロジェクト」からはもうひとつ依頼があった。世界的に有名な彫刻家アニッシュ・カプーアの《スカイミラー》の野外作品が2年前に一旦別府公園に展示されたが、ラグビーワールドカップを機に再度展示するため、公園に設置したままシートで保管されてきた。「別府プロジェクト」より保管用のシートを無機質でないようにつくりかえてほしいという依頼があったのである。これに対しては、日本画と修復を専門とする篠崎悠美子教授に指導をお願いし、卒業生のアイディアを用いたカラフルなシートへと描き変えた【図7】。

・天ヶ瀬公民館と地元小学校との関連

これ以前にも、留学生の日本語を担当されてきた松田美香教授がコースの一員となったことで、

図4　別府駅ラグビーWC

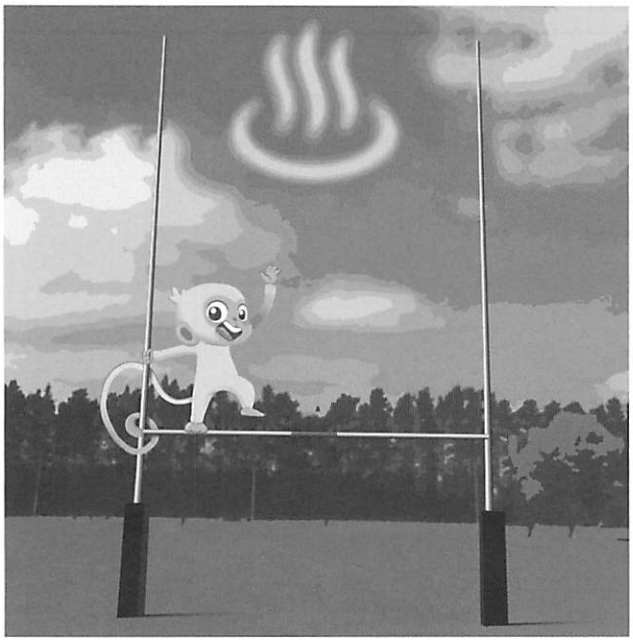

図5

図6

図7

図8

学生が天ヶ瀬公民館のガラス絵を市民とともに制作したり【図８】、留学生と芸術系の教員志望の学生とで小学校でのアートの出前授業を行ってきている。小学生も一緒に作品をつくるために、わかりやすく、かつ美しい作品が前提となる。これまで、バラの花や魚が楽しく泳ぐ姿を描いたもの【図９，10】、そして色紙を用いて作り出したしいたけなど、身近なものをアートとして表現することで小学校からは好意的な評価を受けてきている。

・他学部とのコラボ

また学部を超えて食物栄養科学部の発酵食品学科からの依頼で、甘酒の瓶のデザインを根之木特任教授のもとで、４年生が担当した【図11】。この甘酒はビームス㈱と発酵食品学科のコラボ商品のため、新宿のビームスでも売られ、別府でも土産物として販売されている。食物栄養科学科の依頼によってカレーのパッケージもマンガの学生が金講師の指導によりデザインした【図12】。

このように、芸術系の学生が少しづつ大学内の枠も超え、さらに地域に飛び出してアートの魅力を伝えてきている。年が明けて、マンガ専攻の３年生がデザインした国東の鬼のキャラクタータオルが、地域起こしの起爆剤となり今治製で実作となった。これは国際経営学部で長年地域貢献に学生を指導してきた中山昭則教授のもとですすめられた豊後高田でのプロジェクトに参加したことによる【図13】。

まだまだ芸術系学生の活躍する場は広がる可能性がある。アートは感性を育み、人々を豊かにする。アートを見る人も、アートを手に取る人も、そしてアートをつくる人も。アートの持つ感性の豊かさを地域に循環させてこそ、芸術系の学生の学ぶべき本来の目的が叶う。それを実現できるように、さまざまなプロジェクトがすすめられるだろう。乞うご期待。

図９

図10

図12

図11

図13